

『函館ワンニャン物語』 ⑨ ～譲渡会 1～

◆館岡家宅居間（夜）

洋一と聖子は、テレビを見ながら居間でくつろいでいる。

その時電話が鳴り、聖子が電話を取る。

電話の相手は、アニマルレスキューの代表である。

聖子「あなた、代表さんから電話。」

聖子から電話を受け取る洋一。

洋一「はい。どうしましたか。」

代表「お願いがありました。私のたつての希望なんですが、譲渡会を何とか、野犬抑留所で行いたいです。」

洋一「譲渡会を抑留所ですか。」

代表「はい、そうです。何年も前から保健所の担当には話をしてきたんですが、どうも首を縦に振らないんです。抑留所ですから当然、処分を待つ犬・猫がいるということで及び腰なんですよね。私は逆にその状況を、一人でも多くの人に知ってもらいたいです。そこで、先生のお力をお借りしたいと思い電話をかけさせてもらいました。」

洋一「分かりました。保健所の担当の人と話をしてみます。」

代表「先生、よろしく申し上げます。」

洋一「はい、それでは失礼します。」

洋一は電話を置く。

聖子「代表さん、どんな用事？」

洋一「譲渡会を抑留所でやりたいんだって」

聖子「抑留所？あんな山奥で？」

洋一「抑留所の実態を一人でも多くの人に見てもらいたいらしい。」

聖子「でも、あんな場所にみんな来るかなあ。あんな山奥に、車でもないと来れないんじゃない。」

洋一「今回は、人が集まる、集まらないよりも、一人でも多くの人に抑留所を知ってもらうことが目的だと思うよ。」

聖子「それで、あなたにどんなお願いをしたの。」

洋一「保健所との交渉係りかな。明日にでも、保健所に行って、話しをしてみるよ。」

#### ◆保健所

洋一と担当者が話をしている。

洋一は道徳の授業以来、保健所の担当者とは学校教育という立場でつながりを持っていた。

そのつながりを頼りに代表は電話をよこしたのである。

抑留所開催に弱腰の担当者に対して、洋一は抑留所で譲渡会を開催する意義を説明し始める。

洋一「先日の道徳の公開授業の際には、いろいろな資料を用意していただき、本当にありがとうございました。」

担当「どうでしたか。あのパンフレットは役に立ちましたか。」

洋一「もちろん役に立ちました。本当にありがとうございました。パンフレットもそうなのですが、抑留所のビデオは子供たち、保護者にとって、かなりのインパクトがあったようです。」

担当「と、いいますと？」

洋一「抑留所の檻の前に立つ映像で、授業を終えたんです。そして、子供たちに投げかけました。あなたならどうするかということ。」

担当「子供たちからは、どんな答えがでてきたんですか。」

洋一「その場での答えは、敢えて発表させませんでした。自分の心に問いかけ、真剣に考え、答えを出してほしかったのです。」

洋一は、担当者の顔を覗き込み、話を続ける。

洋一「その後、子供たちや親からの反響がすごかったですよ。中には、抑留所に実際に行ってみたい、という声もありました。」

担当「抑留所にですか。かなり山奥ですよ。子供たちだけでは、無理でしょう。」

洋一「そうです。無理です。」

その答えを待っていた洋一は、すかさず話し出す。

洋一「そこで、今回の譲渡会を抑留所で開催したいんです。そうすれば、子供たちは親と一緒に来ることができます。また、多くの人に抑留所を知ってもらうことにより、捨て犬、捨て猫の数、処分される数も減っていくことにつながると思うんです。ですから、是非お力をお貸しください。お願いします。」

担当者はしばらく黙っていたが、やがて意を決して話す。

担当「分かりました。上司に相談してみましよう。」

洋一「どうかよろしくお願いします。それでは、これで失礼します。」

洋一は頭を深々と下げ、保健所を後にする。

(「函館ワンニャン物語 ⑩」へ続く…)